

審査の結果の要旨

氏名 畠山 聡

本論文は、フッサール『デカルト的省察』第五省察における「他者の身体」の構成に関する難解な現象学的記述を、前後の時期に執筆された膨大な遺稿をも参照しつつ、丹念に精読し、注釈と解釈を施した労作である。

第五省察は、他の主観性に関係するあらゆる志向性の働きをエポケーし、自分固有の領圏に立ち戻ることによって、そこに現れる物体を「他の身体」として捉えることから「他我」認識がなり立つことを明らかにしていくが、この他者経験論は幾多の問題を孕み、これまで多くの批判に晒されてきた。本論文は従来の批判のいくつかを視野に入れながら、まずもってフッサールのテキストに立ち戻り、多くの関連諸草稿をも参照しつつ、第五省察を整合的かつ一義的に解釈しようとした地道な試みである。

第1章で第五省察におけるフッサール自身の問題設定が確認されたあと、第2～3章では、「固有領圏」への「還元」の意味が解明される。論者によれば、固有領圏への還元とは、超越論的エゴにおいて「構成された」自我の領圏への還元であり、そこから、この領圏とは区別されるものとしての「他我」の構成が問われる。自我も他我也「構成されたもの」のレベルにあり、ここからデリダのレヴィナス批判が批判される。続く第4章では固有領圏の「原初性」をめぐる、この領圏での他者経験の位置づけが補足的に論じられる。

第5章では他者経験に特有とされる「付帯現前」が、他の身体物体の現前のみならず、「私自身」の現前にも関わっていることが明らかにされる。この「私自身」こそ第6章によれば、他者経験において「たえず生き生きと現前する」とされる「原創する原本」すなわち「私の身体」に他ならない。第7章では、対化に関する「静態的考察」と「動的考察」との区別が導入され、動的考察が「潜在性の次元」と結びついていることが明らかにされる。そして、私の身体と他の身体物体という現出様式の異なるもの同士の対化（「現象的な対化」）が、この潜在性の次元に関わっていることが示唆される。

第8章では他者経験において他者が調和的に「確証」されていく仕方がテキストに即して検討され、第9章では、第7章で示唆された「潜在性の次元」に関して、他者の身体と対化するとされる「私の物的な見え方」が、「他者の視点」からのものではなく、むしろ「原初的領圏の潜在性」において私の身体が「物体」として統握可能であるというまさにそのことに基づいていることが明らかにされる。そして、以上の議論を通じて終章では、「他者の身体を経験」とは他の身体物体との「重ね合わせ」を通じて「私の身体が潜在性において変様する」経験に他ならないことが主張される。

以上のように本論文は、これまで多くの批判に晒されてきたフッサール『デカルト的省察』第五省察の難解な他者経験論のテキストを、多くの関連草稿をも参照しつつ、整合的に解釈しようとした労作である。フッサール自身による「静態的分析」という性格づけと発生的現象学との関係や、他者の身体の構成からさらに進んだ「他我」の構成の問題など、確かに本論文には議論が十分尽くされていない点も認められはする。しかし、「潜在性の次元」に〈類似性をもたず現出様式の異なるもの同士の対化〉という創造的な事象を見出すなど、本論文が先行研究に対して幾つかの新知見を提示した功績は、十分に評価されてよい。よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに値すると判断される。